

近世後期における神事舞太夫と修験の争論

橋本 鶴人*

近世の関東甲信に所在した神事舞太夫・梓神子を支配した神道系宗教者集団習合家は、神職・陰陽師・夷願人・修験など他の宗教者集団との争論を通じて「家職」と称する固有の職分を確立していった。習合家にとって、梓神子職の独占は組織を維持する上で至上の課題としていたが、近世後期の段階で類似する行為を行う者が多数現れた。その中で、当山派・本山派修験が組織する神子により梓神子職の核になる「ささばたき」の法式が執行されていることが判明して文政四年に習合家は本山派修験と争論に及んだ。梓神子職に紛らわしい行為を執行する修験の背後には神職本所の吉田家が存在し、争論は習合家にとっては修験の対立のみならず、吉田家との対立を内包するものであった。本稿では、修験との争論を中心に、文政年間に展開された習合家と他の宗教者の争論を概観し、近世後期における宗教者の様相と彼らを取り巻く社会状況を明らかにすることを試みるものである。

キーワード…習合家、梓神子職、ささばたき、神職本所吉田家、本山派修験、当山派修験、神子、掛合

はじめに

(1) 神事舞太夫と宗教者集団の争論

近世初期から明治初頭まで関東八州・甲州・信州・会津という限定された領域に「神事舞太夫」と称された宗教者の集団が存在した。集団を率いていたのは神事舞太夫頭の幸松勘太夫家（後には田村八太夫家に交代する）で、幕府から独占を公認された「家職」（職分）を支配下の者に免許する「職札」などの許状を発行し、その役料の徴収を通して集団を維持していた。神事舞太夫頭田村八太夫は近世後期には「習合家」を称するようになるので、本稿では神事舞太夫頭の家について、近世前期の段階であっても「習合家」の名称で統一する。

神事舞太夫の「家職」については、元禄八年（一六九五）年八月十八日 寺社奉行改め舞太夫・梓女家職書上（国文学研究資料館史料館所蔵『諸宗便覧』）が初見である（史料1）。貞享元年の陰陽師との家職争論に際して幸松勘太夫が作成して寺社奉行に提出したものがベースになっており、神事舞太夫は「舞太夫」、梓神子は「梓女」と表記されている。ここに記された文言が職札の原型になった。

【史料1】

舞太夫職

- 一大黒の像前々方配来候事
- 一獅子面を持在々二而釜の毒払申候事
- 一祭礼之宮ニて舞音曲勤来候事
- 一月待日待之時幣帛数珠錫杖を持祈祷を仕並御符守出シ来候
- いづれも習合之神道相勤候事

* はしもと・つると、埼玉大学教養学部非常勤講師、日本近世宗教社会史

梓女職

一紙にてすわうと申ひなかを切釜のむかひにはり釜を払ひ候事

一絵馬申猿馬を引候絵正月配候事

一珠数占死人の口寄を勤候事

右、七ヶ条貞享元年子九月十八日奉行所江幸松勘太夫書之、従古
来勤来候由、弥七ヶ条之通二梓女自分ハ不及申支配下迄急度可相
守之職札之由自今ハ出候時節之年号月日記之、尤陰陽家二紛敷作
業仕間敷段幸松勘太夫証文差上之

神事舞太夫や神職・修験・陰陽師・夷願人（えびす社人）などの宗教者が争論を通じて幕府・寺社奉行による裁許や裁定を得て「家職」（職分）が整理され、組織・集団が形成されてきたこと、各宗教者の本所・支配頭への支配統制により幕府が宗教者総体への支配を行ったことが一九八〇年代から高埜利彦氏を嚆矢として、林淳氏・西田かほる氏・梅田千尋氏・井上智勝氏・中野洋平氏などによる多くの研究により明らかにされてきた（高埜一九八九ほか）。

史料1の舞太夫・梓女家職書上は貞享元年の陰陽師との争論を契機に定められたものであった。支配頭・組頭レベルの神事舞太夫は戦国期には陰陽道にも携わっていた舞々・唱門師に系譜的に遡ることができると考えられ、近世前期、十七世紀後期の段階では陰陽師と紛らわしい業態をとっていたものと思われる。陰陽道本所の土御門家は、習合家・神事舞太夫の陰陽道への関与だけではなく、依拠する両部神道（習合神道）に対しても異議を申し立て、習合家が神道的な集団として存続することを幕府の権威を以て阻止しようとした。土御門家支配下の陰陽師は唯一神道、後に天社神道を奉じて神道的な宗教者集団を志向するので、その

意味では同じ神道的宗教者集団相互の抗争が繰り広げられたと言える。

他方では、神事舞太夫は「月待日待之時幣帛数珠錫杖を持祈祷を仕」と職札に明記されているように、業態には神仏習合による仏教的な要素が強かったと思われる。口寄とともに数珠による占いを行う梓神子も同様である（吉田二〇〇一）。神事舞太夫を描いた明確な絵画資料は残されていないが、神職の装束に仏教の法具を携えるという、修験に類似した存在形態ではなかったかと思われる。神事舞太夫と修験の争論は陰陽師同様に必然であった。

宮本袈裟雄氏によれば、一九世紀前期の文政・天保年間の段階で、南関東でも本山派・当山派・羽黒派合せて八二五軒の所在が確認されるなど、村方では修験は僧侶に次いで最もポピュラーに存在していた宗教者である（宮本一九八四）。一八世紀末の寛政二（一七九〇）年段階で関東・甲信でも六〇〇軒ほどであった習合家の集団に比して多数であった。その点において、神事舞太夫と修験の争論の様相を概観し、その特質を明らかにすることは、近世社会における宗教・信仰の在り方を解明する大きな手がかりになるのではないかと考える。

神事舞太夫と修験の争論については、林淳氏が文政四（一八二一）年の争論について「当本修験一件」という史料（後述）の翻刻を兼ねてその経緯を明らかにしている（林二〇〇五）。その争論は、梓神子に紛らわしい業態の職業や、梓神子職の核を成すものとして習合家が重視していた「ささばたき」（「神託ささばたき」「笹ばたき」「笹祓」とも表記するが、ここでは「ささばたき」に統一する。）を当山派・本山派の両修験が行っていたとして習合家が摘発して掛け合いに及んだものである。当山派は、梓神子に紛らわしい職を行っていた修験当人は勿論のこと、彼らが所属した本所三宝院の江戸触頭である鳳閣寺自らが習合家に

謝罪したが、本山派修験は吉田家から神子許状を受けたことを根拠に頑強に抵抗したために習合家側が出訴して争論に及んだ。争論は、公的には「神子」そのものが存在しない本山派修験側が敗訴した。

本稿では、林氏が明らかにした争論の経緯を踏まえながら、他の宗教者集団の動向と習合家を取り巻く文政年間の社会情勢との関連性を明らかにしつつ、争論の意味について考察したい。

(2) 文政年間の争論

林氏が研究のベースとした石山家文書（埼玉県所沢市生涯学習推進センター所蔵）には、幕末に習合家役人・組頭として活躍した石山蔵人が筆写した歴代の争論の記録が残されている。その中の「諸出入日記覚帳」には寛文年間（二六六一～一六七三）の修験との争論、貞享年間（一六八四～一六八八）から正徳年間（一七一～一七一六）にかけての夷願人との争論、近世全般にかけて展開された陰陽師との争論が記録されており、前述の「当本修験一件」及び「修験道一件日記」や、神職本所吉田家との争論の記録「習合家吉田家公事願書濟口下ケ御裁許写」、富士講との争論の記録「富士講出入日記」などととも、習合家と他の宗教者との関係が概観できる（いずれも石山家文書）。

これらによれば、習合家と他の宗教者集団との争論が近世後期では文政年間（一八一八～一八三二）に集中していることが判明する。前述の文政四年における当山派・本山派との争論もその一つであるが、文政元年には陰陽師に訴えられて敗訴、文政七年には吉田家関東役所出役を訴えて幕府裁定による実質的な勝訴、文政十一年には上総国における富士講への出訴により勝訴するなど、多様な宗教者集団やグループを相手取

って争論を展開した。

时期的には、寛政改革の余波という状況の中で、老中松平信明により身分統制・治安維持の一環としての政策がとられていた。一つには、人口流入と打ちこわし、にわか宗教者の増加などによる都市の治安の問題があり、農村部では、人口流出・農村崩壊と年貢減少、偽宗教者の徘徊などが問題となり、都市では人返し政策、農村では組合村の結成、取締出役の設置による治安維持と農村再建などが図られていた。

文政二年には村方における修験神子通行保証の触が幕府から出され、偽宗教者の排除促進による治安維持が図られた。この触は、治安維持強化の社会的動向の影響を受けて、檀家（旦那）を回る宗教者への村方の規制・警戒が強められたという事態に対して本所・本山・支配頭側からの要請に基づいて出されたものと思われ、寛保の大水害直後の寛保三（一七四三）年にもエリアは異なるものの同じ内容のものが出された（橋本二〇一五）。災害や社会的不安が地域社会の崩壊をもたらし、偽宗教者を発生させる社会的土壌になったが、逆にそのような類の人々によるものであっても許容される信仰的な需要が社会的に存在したのである。本所・本山・支配頭の統制下にある宗教者への保護と統制を通じて都市・農村の問題を緩和させることが幕府の方針であった。

それに先立つ寛政年間（一七八九～一八〇一）には、天明二（一七八二）年の諸社禰宜神主法度の再触を背景に活動を活発に展開する神職本所の吉田家と、吉田家に精力的に対抗する神祇伯の白川家とともに江戸に役所を構えるようになり、寛政三（一七九一）年の陰陽師支配の幕府再触により陰陽師本所の土御門家も支配下獲得の動きを強めていた。この動向は幕府の宗教政策と本所・本山・支配頭側の意図が一致していたことを示していたと考えられる。

その反面、にわか宗教者を含む宗教者総体の量的な拡大は、本所・本山・支配頭にとつては支配拡大の好機ではあったが、組織・集団の構成員の多様化という事態をもたらし、支配下の宗教者が統制を超えて活動することもあった。統制能力の限界は、やがて組織・集団の性質の変質をもたらした。例えば、梅田千尋氏が指摘しているように、土御門家は「後期本所」への転換を遂げ、支配下の陰陽師組織はコアな陰陽師の組織から多くの「売卜者」、兼業者を多く含む組織に変容した。村方に所在する「家」を単位とする組織から許状の発給を介した「職」に携わる者の集団に変化を遂げたのである（梅田二〇〇九）。吉田家・白川家も同様の変質を余儀なくされた（井上二〇〇七）。「家」を単位として「他職」「他家」の宗教者を組織しないことを原則とする習合家にはそのような変化はなかった（橋本二〇一八）。文政年間の争論は、かかる状況を背景に展開されたのである。

1 文政四年の争論の歴史的前提

（1）習合家とささばたき

習合家支配下の梓神子がささばたきに携わってきた起源や歴史的経緯については不明である。それは元禄十三（一七〇〇）年と享保十六（一七三二）年に習合家が行う「神託」「打祓」「居祓」「笹祓」（ささばたき）について「神市」（神子）の職業に関わるものとして御府内・相州の陰陽師がその停止を求めて争論を起こしているように、梓神子・神子の双方に関わる作法であったと思われる。

文政元（一八一八）年九月、関東陰陽家触頭戴兵庫配下改役を勤め

る陰陽師平沢左仲（御府内西久保青松寺門前居住）は「職業混雑出入」として、堀江左近（本八丁堀一丁目居住）と本庄内記（下谷坂本三丁目居住）の二人の神事舞太夫を相手に争論を起した（諸出入日記覚帳）。江戸市中での神事舞太夫と陰陽師の争論である。左仲によれば、左近と内記は、寺社奉行に認められた家職には記載が無い「神託御うらなひ」「神差帰上神託寛宝珠うらなひ」などの看板を掲げ、占考に使用する算木などを店舗兼用の居宅に飾って陰陽師と紛らわしい業態をとっているとした。争論相手の神事舞太夫によれば人事の吉凶を占考する「うらなひ」は習合家一派の専業であるとした。占考は陰陽師の家職としていた左仲は左近・内記の行いを陰陽道職業混乱につながるものとして規定し、占考の他に「神託（ささばたきと思われる）」「打祓」「居祓」も取り締まっていたと主張した。

左仲との争論の展開は、習合家による梓神子統制に大きな影響を与えた。文政二年四月から九月の裁許までの間、寺社奉行からの吟味に返答するかたちで、習合家は梓神子の由来やその家職について上申し始めたのである。その根拠として『古語拾遺』『先代旧事本記』を以て「習合神道神差帰上法式神託笹祓」（ささばたき）を説明し、『五部書細註』により梓弓の由来に触れて、職道古法の神差帰上の法式により「神崇り生霊死霊諸障礙を分候者一派神託笹祓居祓打祓」を行っているとする。神託の際の神降歌・聞神歌・神託歌・寄神歌・標神歌・梓弓神返之歌は口伝により伝授される一派の「源秘」とされている。別の上申書ではささばたきの方法について、初めに清之呪文を唱え、幣束を持って神降の歌を執行すれば病人の氏神や家内の荒神等による神託があり、その後で病人の祟り・障り・生霊・死霊などが出て「何之崇何之恨」を告げるという。それを願主の依頼に応じて除祈願を行うとする。

この説明によればささばたきは、神あるいは死霊・生霊の祟りや恨みが原因と考えられた病人を治癒する民間療法の一つとして行われたことがわかる（橋本一九九六参照）。神社の神子が湯立神楽の際に笹の葉を用いてトランス状態になって託宣を行うものとはその点において異なっている。逆に習合家としては習合家支配下以外の者が、神社ではない場所にて神楽を伴わない法式で行う「笹祓」は、梓神子職のささばたきに紛らわしい職業と見なしたことが考えられる。

文政二年九月、寺社奉行の裁許により争論は習合家側の敗北に終わった。左近・内記と左仲作成の「差上申一札之事」によれば、占考を行っていたことについて職札に「珠数占口寄」とある文言を誤って理解していたこと、「うらなひ」などの看板を掲示していたことを寺社奉行から不埒とされたのである。神託などについては裁許には言及されていないので、陰陽師側の主張は退けられたようである。

文政元年の争論では寺社奉行から占考に関与することは厳しく制限されたが、ささばたきについては自らの主張が容れられたものとして争論の結果を総括した習合家は、ささばたきを支配下の梓神子固有の法式であるとの認識を強めたと思われる。

その流れの中で文政四年四月に始まるのが梓神子に紛らわしいと見なした職業を行う修験をはじめとする宗教者の摘発Ⅱ「掛合」であった。

（2）梓神子をめぐる本山派・当山派との関係

修験と神事舞太夫との争論は、史料上は寛文十二（一六七二）年に遡る。「神事舞太夫共由緒」（國學院大學図書館蔵黒川文庫）所収の貞享元年の幸松勘太夫書上写には「寛文十二子六月廿七日山伏方と舞太

夫出入之節 御奉行戸田伊賀守様・小笠原山城守様・本多長門守様御裁許之時舞太夫女房可為梓神子之御証文被下指上申事」とされている。習合家支配下の神子は全て梓神子であり、いずれも舞太夫の女房で、夫のいない梓神子もいるが、山伏その他の「別人」と夫婦になることはない旨を寺社奉行に上申している（諸出入日記覚帳）。山伏とは当山派・本山派いづれを指すものか不明であるが、梓神子の支配・所屬をめぐり緊張関係が夷願人同様に続いていたことをうかがうことができる。

修験道の神子の職分に関しては、近世初頭の元和四（一六一八）年頃に発生した奥州田村郡（現在の福島県田村市及びその周辺）における社家の神子と修験の守子の争論が有名である。藤田定興氏が全体的な経過を明らかにしているが、これは神職本所を志向する吉田家の支配下社家と天台系修験道本所の聖護院支配下の本山派修験との抗争の中で問題となったもので、吉田家・聖護院から支配下の神子・守子に対してそれぞれの宗教行為を守るようにとの内容で元和五年に法度が出された（藤田一九九六）。奥州岩城郡（現在の福島県いわき市）では寛文三（一六六三）年に吉田家社家と本山派修験の間で争論が発生し、吉田家・聖護院からは元和五年よりも厳密なかたちで支配下に法度が出された。それらは若干の字句の相違はあるものの、「神子者神道勿論也、修験道之守子者不着千磐舞絹験者寄付之幣於持役勿論也、但神道之幣止波格別也、其外持鈴着千磐舞絹持篠幣祓於致湯立神楽神託宣等者為社家之巫女事」という法度であり、神子は神職として吉田家に所属すること、修験道では守子として、それぞれの幣束を用いること、鈴を持ち千磐舞衣を着して湯立ての神楽で託宣を行うのは神子に限ることなどが定められた。寛文六年三月に幕府は裁許状により「神子者為神職之条修験道並守子之作法一切不可仕」、「守子者為験者寄付之条神子之作法一切不可仕」として両者の

区分は幕府公認の下にさらに明確にされるにいった。これが本山派修験の守子（神子）の職分・装束等に関する一つの判断基準となったのである。

三宝院支配下の神子は、本山派とは異なって名実ともに組織内に明確に位置づけられており、延宝二（一六七四）年八月九日に寺社奉行に命じられて定められた法度では、神前の湯立神楽や舞衣の着用に関する規定が存在し、元禄十一（一六九八）年に当山派から支配下修験に出された定では神職とされている。文政年間に吉田家が佐渡において当山派の神子に干渉しようとした事件が有名であるが、吉田家の干渉に対して当山派が同じ修験でも本山派とは異なるとしてそれを公然と拒絶したのはそのような歴史的経緯があつたのであつた（中山一九三〇）。当山派でも延宝二年の法度では「口寄之筋」を跡目にすることや「妙儀神託」厳禁の規定が存在し、延宝七年の「巫女法度之事」以降、社家・博士・俗人との縁組・弟子取りを禁止しているなど、梓神子に類する者やその関係者との人的な交流は制限をかけていた（埼玉県立文書館所蔵菊池家文書「当山修験并神子御条目」 関口二〇一五）

寛文十二年の幸松勘太夫による寺社奉行への梓神子支配に関する書上はこのような吉田家と当山派・本山派との抗争に乗じて作成・提出されたものと思われる。ちなみに寺社奉行の裁許の詳細は不明であり、その実効性が保証された事実を確認されていない。

（3）信州における羽黒修験の梓神子補任授与

梓神子支配をめぐる夷願人との争論は、正徳三（一七一三）年の梓神子法例公認により終息し、習合家の梓神子支配体制が一定の完成を見

たとされている。

しかし、宝暦七（一七五七）年に羽黒派修験が信州小県郡根津村（現在の長野県東御市）をはじめとする東信の神事舞太夫を廻り、梓神子「補任」の許状を発給する事件が発生し、その支配体制は絶対的なものではなかったことが露呈した（石山家文書）。

その経緯の詳細については不明であるが、宝暦七年十一月一日に羽黒山昇光寺大先達智憲院伝燈大阿闍梨堅岩法印竟然から長久保宿飯島兵庫妻の「朝日神子」に宛てて出された「梓神子職之事」とする補任状（免状）の写が残されており、「任先例用有法量」で朝日一代に対して梓神子職を免許するというものであつた。この朝日という梓神子は、『聞伝叢書』所収の「上野国甘楽郡磯（砥力）澤村御閑所梓神子人別帳」に名前が現れる長久保宿飯島与太夫の「姫梓神子 朝日」のことと思われる。飯島与太夫は神事舞太夫国役人や梓神子組頭を勤めており、飯島兵庫は同書所収の梓神子法例にその名前が見える。飯島兵庫は正徳年間に展開した梓神子をめぐる夷願人との争論で中心的な役割を果たした神事舞太夫であり、他の宗教者から許状を受ける行為が梓神子法例などの習合家の組織的規制に抵触することは十分に認識できたはずである。最終的には、宝暦十（一七六〇）年に信州支配下神事舞太夫から提出された一札により補任状は習合家支配所に預けられることになった（史料2）。

【史料2】

一札之事

一 私共信州御支配下二而年々御掟書ニ印形仕差上候然ニ羽黒山補任拾式人取候儀守り札等之存寄者曾而無義ニ御座候然共御掟書ニ相障り候ニ付御奉行所様江被 仰上候趣一言之申訳無之候□御役人

衆当宿致訴詔内済可然候段被 仰候ニ付当宿市右衛門新兵衛取扱
候而右拾式人通り之補任支配所江御預り已来右方書付等宛候ハ、
支配所江訴状を以取候様ニ可致候由訴詔之段御承知被下置私共一
同難有奉存候此度之儀者如何共急度可被 仰付処長々相詰困窮仕
候故御有免被成下且又難有仕合ニ奉存候然ル上者 御奉行所様方
右訴状御下ケ預可被下候勿論以來新法他職等之儀相慎堅ク仕間敷
候依之拾式人連判を以一札差上申候処仍而如件

宝曆十辰年十二月廿八日

信州根津村

丸山式部

(六人略)

小泉村

小林左京

(一人略)

下手込村

持田彦太夫

長久保宿

飯島兵庫

下手込村

持田左膳

御支配御役所

一札を概観する限り、羽黒修験から免許を受けなければ梓神子職を勤められない、というような働きかけや恫喝を受けたことは察せられず、補任状の発給のプロセスやそれに伴う金品の授受は勿論、信州でも重要な役割を担う神事舞太夫たちが補任状を授与された理由もわからない。また、補任状も梓神子一代限りのもので、羽黒修験側が長期的に組織化することを意図していたかどうか不明である。結果的に信州の神事舞太夫・梓神子が補任状をそのまま受けている状態について他職と混雑を禁止した習合家の掟に背くものと認識し、補任状も習合家役所に提出するかたちで放棄するとしている。

補任状の発給から放棄まで約三年間の歳月を要し、羽黒修験の働きかけにそれ程抵抗無く応じる余地が神事舞太夫・梓神子側に存在していたことは事実であつたと思われるし、その意味で梓神子を核とした信州の習合家による支配体制は磐石のものではなかった。それは、正徳三年の梓神子法例の成立・公認を以って梓神子の排他的支配の完成と考えた習合家に衝撃を与える事実であつたろう。宝暦七年の羽黒修験補任状一件は、羽黒山自体を相手取つての争論には発展せずに終息した。

以上のように、寛文十二年以降、百年以上にわたり直接修験を相手取つての争論は発生せず、本山派・当山派・羽黒派を問わず習合家と修験とは相対的に安定した関係になつていたと見なすことができる。

2 文政四年の争論

(1) 文政四年の梓神子取締り

習合家と修験との争論が再度発生するのは寛政年間(一七八九～一八〇一)に入ってからであつた。以下、石山家文書の「当本修験一件」及び「修験道一件日記」により争論を概観する。

寛政十二(一八〇〇)年六月に当山派修験が梓神子に紛らわしい勤め方をしたとして、神事舞太夫菅根庄太夫と武州鹿室村(現在の埼玉県さいたま市)の大寿院・不動院他三人と習合家役人菅根庄太夫が担当して争論になったが、これは速やかに当山派側が謝罪することで終息した。「神職之者評定所着席之例」(『徳川禁令考』前集第五)によれば同年同月に「梓女」(梓神子の別称)が寺社奉行松本周防守と勘定奉行菅沼下野守の協議の上で評定所着座が下縁と決められた。この争論を契機とし

て決定された可能性が考えられる。神子（巫女）については寛政十年に下縁に決められており、幕府評定所における女性宗教者の神子の格式整備について、幕府は意識していた。

文政四（一八二二）年四月に習合家支配所役人本庄内記と菅根正太夫が、寛政十二年の争論にもかかわらず当山派修験触頭鳳閣寺支配下に梓神子に紛らわしいことを行っている者が存在していることを鳳閣寺に指摘した。それにより習合家による掛け合いが展開されたのである。

梓神子に紛らわしい職業を行っているという情報に基づいて、習合家は出役人を各地に派遣した。四月二日に役人鈴木豊後と菅根正太夫は武州葛飾郡吉川村（現在の埼玉県吉川市）修験賢澄に「掛合」に及び、同日に蓮沼村（現在の埼玉県さいたま市）当山派修験常光院、二二日に鹿室村（現在の埼玉県さいたま市）当山派修験大寿院・不動院と廻った。二三日には蓮沼村の神事舞太夫松田壱岐が加わって武州足立郡原山村（現在の埼玉県上尾市）当山派修験養善院、二四日に足立郡佐地川領家村（現在の埼玉県さいたま市）の神尾采女（吉田家神職）女房たか、二五日に武州入間郡川越蓮馨寺門前（現在の埼玉県川越市）の養伝院跡うの、入間郡入間川村（現在の埼玉県狭山市）正泉院を廻って二六日には鈴木豊後・菅根正太夫は江戸役所に帰った。更に二七日には、府内八丁堀壱丁目の神事舞太夫堀江左京と高橋渉は本所亀戸町（現在の東京都墨田区）の本山派修験三乗院との掛け合いに及んだ。後述するが、三乗院との争論は六月末まで及ぶものとなった。

菅根正太夫は居住する太田新井村（現在の埼玉県白岡市）の領主一ツ橋家役所に三乗院との争論終息を届け出た翌日の六月二七日には神事舞太夫八木左京とともに下総国葛飾郡矢切村（現在の千葉県松戸市）百姓権兵衛娘つよ（当山派修験和合院触下）、水戸海道新宿（現在の茨城県

常総市）当山派修験五穀院隠居定国院妻亀翁に掛け合い、文政四年の修験との掛け合いを終了した。なお、掛け合いの対象になった修験が居住する町・村もしくは近隣の地域には神事舞太夫が居住しており、掛け合いに際して彼らの案内・仲介があったものと想像される。

合計十一件に及ぶ掛け合いは、梓神子に紛らわしい職業を勤めたと規定された者、具体的にささばたきや珠数占・大黒配札を行っていた者や「霊託」を行っていた者に対してその禁止を求めて行われた。掛け合った相手は本山派修験一件、吉田家神職一件の他の九件は当山派修験であった（所属が明記されていないものもあるが当山派の可能性が高い）。摘発された人数は本山派よりも当山派が多い。この相違は当山派では神子が正式に修験道の中に位置づけられていたのに対して本山派では神子が存在しないことになっていたことが原因と思われる。神子がいない本山派では本来的には梓神子に紛らわしい職業を行う神子が建前の上では存在しなかったのである。

なお、吉田家神職神尾采女の女房の母は信州一ノ宮神子職であり、「神託笹払」は幼少から母が行うのを見て覚えたとのことで、当地に来ても渡世のために続けていたがそれが習合家の職業に抵触するとは知らなかったという。

掛け合いになった場合、多くの当山派修験は即座に習合家に謝罪しており、例えば鹿室村不動院は神事舞太夫の高橋主水・松田壱岐・中田左近を仲介役に鈴木豊後・菅根正太夫の止宿先に来訪して大黒配札を謝罪した。吉川村賢澄と蓮沼村常光院は神事舞太夫高橋主水を仲介役に、江戸役所まで出向いて詫言を入れた。

当山派修験触頭鳳閣寺は支配下添合神子が梓神子に紛らわしい勤方をしていなかったことを素直に認めて謝罪するとともに支配下への禁止の徹底

を図ることを条件に、寺社奉行への出訴を思いとどまるように習合家に嘆願した。

この背景には、当山派自らが添合神子を神職と規定し、「妙儀」と呼ばれる歩き巫女や口寄せを行う者の弟子入りや婚姻を禁止しており（関口二〇一五）、公的には当山派修験に梓神子やそれに類するものは存在しないことになっていたことと関係があると思われる。

本山派では、一八世紀後期に著されたと思われる「修験本当偽邪弁論」（埼玉県狭山市篠井家文書・『狭山市史』中世資料編）によれば、「神子者神職勿論と有之ハ、惣之一或ハ託宣神子之事也、其外ハ御子と可書之、是ハ修験方之手下也、梓御子ハ乞食同然たる間、修験等一座不致事二候」として神職・修験としての神子を分類しつつ、「梓御子」≡梓神子は「乞食同然」と規定して、梓神子を差別するかたちで修験道自体からの排除を図る言説も確認できる。

以上のように、梓神子については、当山派・本山派ともに排除する傾向にあったのであるが、本山派の三乗院は「ささばたき」に固執した。次にその経緯を記したい。

（２）本山派修験三乗院の抵抗

① 争論のはじまり

当山派が触頭を先頭に習合家の掛け合いに屈していたのに対して、掛け合いに最も激しく抵抗したのが本山派修験の本所亀戸町三乗院と添合（妻）のミチ（「ミチ」とする表記もあるがここではカタカナで統一する）事「出羽」であった。本件は掛け合いにとどまらず、習合家から寺社奉行に出訴する事態に発展した。その経緯を次に略記する。

文政四年四月二八日、堀江左京と高橋渉が三乗院方に梓神子に紛らわしい勤方を行ったこと、特に「しんたくささばたき」との看板を出していた件について詰問したところ、「不法之挨拶」のため、家主に公事について届けて帰ってきた。

五月四日、亀戸町の八木左京と大橋内記が役所に願書と諸入用（一か月分）一分二朱を届け出た。亀戸町の神事舞太夫は三乗院・ミチと直接対決することはなく、争論の費用負担や情報収集を専らにする。

五月七日、鈴木豊後と菅根正太夫は飯田町中坂（現在の東京都千代田区）の本山派修験触頭大行院へ掛け合いに行った。対応した大行院役僧宝善院によれば、度々三乗院に呼び出しをかけたが、代理の僧ばかり出頭させるので、病気であれば駕籠を使っても出頭するようにと厳しく命じたところ、三乗院が参上した。そこで問いただしたところ、妻ミチは吉田家の免許を受け、「あつた明神之神子」になったとのこと、それを差し止めては吉田殿に対して「氣之毒千万」（申し訳が立たないという意味と思われる）と訴えてきたという。

五月八日、本庄内記・鈴木豊後・菅根正太夫は役所で相談し、触頭大行院共々相手取り、訴訟を起こすことを決めた。

五月十日、本庄内記・菅根正太夫は本山派江戸役所を務める赤坂（現在の東京都港区）の水川大乘院に掛け合い、対応した役僧本覚院から本山派には神子は存在しないとの言質を得た。その上で大行院は大乘院支配下にあるのかと確認したところ、大行院は幸手不動院（本山派諸国先達の一員とされた有力修験）出張のため支配下には存在しないこと、訴訟や濟口の際には寺社奉行の指示があれば奥印する場合があることを確認した。そこで正太夫たちは三乗院たちとの争論について本覚院に伝えることで本山派江戸への訴訟の意志の通告としたのである。

五月十四日、習合家による訴訟への動きを察知した亀戸町の町役人甚助・清吉・金蔵・勘右衛門が習合家役所を訪れて、この一件について取扱人（立会人）となる事と看板を撤去させるので訴訟は回避してほしい旨を申し出た。大行院からも書簡が届き、看板を撤去させるなどの措置をとるので取扱人の意志も汲んで和談としてほしい旨が伝えられた。町役人・大行院の申し出が看板の撤去に絞られている点を警戒した習合家側は梓神子に紛らわしい職業自体の停止が和談の条件であることを両者に伝えた。

五月十五日、取扱人の亀戸町役人四人からの一札とそれに同意する大行院からの書簡が習合家に提出されたが、翌十六日には大行院は翻意せざるを得ない状況に追い込まれたようであり、習合家は大行院との連絡が不通になった。

②吉田家の介入と和解交渉の破綻

五月十八日、習合家役所に亀戸町の神事舞太夫八木左京・八坂但馬・大橋内記から立会人の町役人から破談になった旨を伝えられたとの報告が上がってきた。習合家からの追求に窮して三乗院に看板を撤収させて和解させようとした亀戸町役人に対して、吉田家は三乗院親類の修験を通して「上意」の名目で、習合家に屈して神子の許状を返却すること、看板を撤収すること、「職業」（ささばたき）を務めないことは不埒であるとし、今日からでも看板を掲げてこれまで通り職業に従事すること、和談のために「田村沢之助」（習合家）に差し入れた書面を回収するように伝えたという。さらにそれを実行しなければ町役人を相手取って訴訟を起こすとする高圧的な態度を示した。町役人はその「上意」に驚愕して自主的な和解の方策を撤回せざるをえなかった。

五月十八日の破談により習合家側は友山求馬、本庄内記（役人小窪

造酒之進煩による代理）・鈴木豊後、在方役人菅根正太夫・堀江左京（在方役人友山民部煩いによる代理）は、改めて寺社奉行への出訴に踏みきった。担当の公用人田副利右衛門からは寛政十二年の当山派との内済証文（梓神子職をめぐる争論）と寛政八年の吉田家との内済証文（三社権現祭礼での吉田家神子神楽をめぐる争論の証文）の提出を命じられた。

③寺社奉行の吟味と和談成立

六月六日、寺社奉行松平伯耆守により両者への吟味が始まった。習合家側は本山派修験に存在しない神子職を三乗院・ミチが吉田家から免許され、ささばたきを務めていることは不法であり、触頭大行院も抗議に対して言を左右にして埒が明かない状況は不法であると訴えた。それに対して三乗院・ミチ側は寛文年間には吉田家から許状を受けて百六十一年にわたり神託ささばたきを無難に務めてきたとする新たな由緒を主張した上で、ここで停止を命じられては渴命の危機であると嘆願した。大行院には改めて本山派における神子の有無を尋問したところ、触下のうちでは三乗院以外は一人も存在しないため、神子職をやめるように説得してきたが、数年来務めてきたことなので停止するのは困難であるとの主張で対処しかねていたと返答するなど、修験側内部の意見の違いを露呈させながらも、両者の主張は平行線をたどった。

寺社奉行役人は、大行院が支配下の修験を統制できずに神子職従事を放置したことを以て修験側を咎め始めた。支配下の者は子も同然である（逆に触頭は親にあたる）という例えを示した上で、子が盗みを働いた場合、それが渴命（困窮）を動機とするやむを得ない動機であってもその事実を看過できるかと問いかけ、修験道に存在しない神子を務めるミチは神事舞太夫の梓神子職を勝手に行う「職盗人」ではないかと断じて厳しく詰問した。それは論しにも類するものであったが、同時に渴命

を理由として自己正当化を図る三乗院・ミチへの掣肘を意味していた。

これに対して大行院は反論しがたいとの態度を示したが、龍王院・ミチは吉田家からの免許があるので務めてきたと再度主張したので、役人側はそもそも触頭大行院の指示にも従わずに訴訟という事態に至っているのであればその一件だけでも容赦することはできないとして厳しくミチたちを問い詰めた。その状況の中で完全に反論不能に陥ったと意識した大行院は、寺社奉行と習合家に熟談による和解を申し出た。

和解に向けての協議は、八日から習合家役所において習合家役人と山本院（大行院煩のため代理）と龍王院が集合して開始された。十一日には亀戸町の甚助・清吉も加わって修験側からの詫一札がまとめられた。

それをうけて十二日には寺社奉行のところに双方関係者が集まり、協議の上で済口証文を作成した（史料3）。

【史料3】

差上申済口証文之事

神事舞太夫頭田村健之丞後見友山求馬并役人共々幸手不動院触頭
元飯田町大行院同人触下本所亀戸町孫兵衛店三乗院同人妻ミチ事
出羽相手取職業混雑出入申立御詔奉申上六月三日御差日之
御尊判頂戴相附候処相手方々茂夫々致返答書當時御吟味中ニ御座
候処御日延奉願双方掛合之上熟談内済仕候趣意左ニ奉申上候
一 大行院儀者触下三乗院妻神詫さゝばたき之看板差出梓神子と紛敷
勤方致候由掛合有之候ニ付不相成旨申付候得共数年來勤來候趣相
歎キ候与而等閑ニ致置候者心得違之旨申立以來拙僧触下ニ而梓神
子ニ紛敷儀決而為仕間敷候致約定面之家職相守可申答
一 三乗院并妻ミチ事出羽義一派修験道ニ無之職業相勤殊ニ吉田家方

神子免許申請候者重々心得違ニ付扱人を以て熟談ニ候者以來梓神
子紛敷儀致間敷旨之一札詔方江差入候上者詔方ニ而茂是迄修
験道ニ紛敷勤方不致候得共猶又修験道ニ紛敷儀致間敷旨支配下之
もの江可申渡答ニ而双方無申分熟談内済仕候偏ニ御威光与難有仕
合ニ奉存候然上者右一件ニ付重而双方共御願ケ間敷義決而申上間
敷候依之連印済口証文差上申処如件

文政四年己六月

神事舞太夫頭田村健之丞後見

訴訟人 友山求馬 印

同支配下役小窪造酒之進煩ニ付代兼

本庄内記 印

鈴木豊後 印

菅根正太夫 印

同在方役人 同友山民部煩ニ付代

堀江左京 印

幸手不動院触頭

相手 元飯田町 大行院 印

右触下

本所亀戸町孫兵衛店

三乗院煩ニ付代 印

龍王院 印

右三乗院妻

ミチ事出羽 （右爪印

寺社御奉行所

内容は、大行院は三乗院・ミチが梓神子に紛らわしい職業を務めてきたことを放置してきたことを心得違いとし、三乗院・妻ミチは本山派修験道に無い神子を吉田家から免許を得て務めたことは心得違いであったと結論付けていた。修験側の実質的な全面敗訴というかたちでの済口証文であった。この証文により訴訟人方・相手方の双方が紛らわしいことをしないようにとの文言が添えられている。和解を目的とする済口証文の言い回しとは思われるが、神事舞太夫・梓神子と修験の類似性を双方ともに払拭できていない印象がある表現である。

3 文政四年の争論の意義について

(1) 習合家の成果と限界

文政四年四月から六月までの期間を要したが、習合家は当山派・本山派修験が行う梓神子に紛らわしい法式・行為を摘発して停止に追い込むことに成功した。文政元年の争論における陰陽師への敗北を契機に習合家が意図した、ささばたきの独占への試みが寺社奉行から認められたのである。これ以降、修験との争論は史料上確認されていないが、ここに一つの疑問が残る。習合家は修験が行っていた梓神子に紛らわしい行為を全て摘発できたのであろうかということである。

当山派修験において梓神子やそれに類する者の存在が度々禁止されているということは、実態としてそのような者が多数存在していたことを示していたと思われる。そもそも「梓神子職」と見なされる「職」に携わることには制限を加えられたのは関東・甲信という習合家の勢力範囲に限定されていた。全国の修験を支配する本山派・当山派にとって、習

合家がささばたきを独占するという事態は、習合家が特権を認められた関東甲信における特殊事情と考えていたと思われる。習合家が存在しない地域では、梓神子職の執行は修験固有の問題にはなり得ても、集団間の争論にはならないからである。

本山派所属の守子は、神田より子が東北の事例で明らかにしているように、近世を通じて一般に「神子」と称されていたことが多く、神社における神事に従事して湯立神楽の笹ばたきを行っていた(神田二〇〇一)。本山派修験道本所の聖護院もその実態と寛文法度との乖離は認識していたとされる。聖護院としては、支配下の修験添合の守子から「神子」として活動する要求があれば、それを厳密に制止する理由は存在していなかったと思われる。

摘発された修験は神事舞太夫が居住する村に隣接、あるいは近接する場所に居住している点にも留意すべきである。これは、習合家の情報収集能力と「掛け合い」に要する行動能力の限界を意味しており、支配下居住・活動領域に限定されていたと見ることができる。習合家の役人を派遣できる範囲でしか摘発できなかったのであろう。

当山派江戸役所鳳閣寺が支配下を統制できず、本山派江戸役所氷川大乗院に至っては支配下の修験に関する情報収集能力自体に限界があるなど、そもそも三宝山・聖護院両本所による修験への支配が貫徹されていたとは言い難い。このような状況においては寺社奉行の裁許または裁定を以てしても習合家には梓神子あるいは梓神子職を行う者への実効的な支配を行うには限界があったと思われる。

(2) 争論における吉田家の位置

亀戸町役人による和談への動きを一転して破談に追い込んだ吉田家の存在に留意する必要がある。

神詫ささばたきを「合法的」に行うために三乗院・ミチは吉田家に入門して神子の許状を受け、「出羽」を名乗って神子として活動するようになった。おそらくは三乗院・ミチの意識の根底には、本山派の守子は神道・当山派の神子と実態として差異が存在しないという認識があったと思われる。三乗院・ミチによる吉田家からの神子許状受領はその意識に基づく行動を対外的に認知させる方便でもあった。

吉田家の場合、天保年間の吉田家老の主張によれば神子は神道の職号であり、梓弓を扱う者（梓神子）は吉田家支配下ではないこと、当山派修験の添合・娘で神子職の許状を受けるものはいらるが、本山派の添合・娘は守子と称することがあげられている（『大日本近世史料』出家社人之部）。吉田家は梓神子を完全に支配下から排除しているが、本山派修験については神子とは称していないとするのみで、支配下（許状発行の対象）からの排除については曖昧に表現している。

このように寛文年間の争論に基づく神子・守子を区分する法度は聖護院・吉田家双方において遵守されなくなっていたと思われる。吉田家の神子に関する規定の曖昧さは、神子たることを志向する三乗院・ミチの要望を受け容れる余地となったと思われる。

三乗院・ミチは吉田家の神子許状取得を最大限の根拠にしつつ習合家に抵抗した。当山派が神子であることを当然のものとして、梓神子に紛らわしい業態をとっていたのに対して、建前の上では本山派には神子は存在しないために神子になることから出発せざるを得なかったミチは当山派修験とその添合神子とは意識・行動が異なっていたと思われる。近世において神子職には、修験を含めて許状の有無を問わず多様な人々

が従事していた現実があり、その様な人々を支配下に吸収したい吉田家の意図と、神子としての社会的位置を得て安定した職業に従事したい三乗院・ミチのような人々の志向が合致した結果と思われる。

（3）対立の構造

文政四年の争論では神子許状を発行した吉田家は何らの咎めも受けず、習合家から訴えられることも訴訟の場に吉田家関東役所が呼び出しを受けることもなかった。

亀戸町役人を恫喝して看板揭示とささばたき継続（習合家の掛合への拒否を意味する）を吉田家が指囃したのは、ささばたき停止が渇命に直結するとして抵抗した三乗院・ミチ側の意向を汲んだものとも思われるが、穏便に争論を終結させようと奔走する町役人たちの労苦を一笑に付すかのような言動は三乗院・ミチのことを考慮しているとは言いがたい。寺社奉行役人からの詰問に対して大行院を含めて三乗院・ミチが論理的な反論をできないまま、最後には生活のために行った「職盗人」として論される有様であったことは、吉田家からの寺社奉行への工作はおろか内部での理論武装を含めた支援も何らななかった証拠であろう。

習合家は吉田家を争論の相手にすることができなかった。亀戸町役人が企図した和談を破綻させた恫喝が吉田家から直接発せられたものの、あるいは文書を以て行われたものであればともかく、三乗院親戚の修験を通じたものであったので、出訴の証拠も存在しなかったであろう。

また、寺社奉行役人も三乗院・ミチが吉田家の神子許状発給を神子職従事の根拠として主張したことに対して、許状を受けたことを厳しく問題視することはあっても、許状を発給した吉田家による神子免許授与

の方法の正当性について論じることとは全く無かった。

三乗院との訴訟当初の段階において、寛政八年の神楽執行をめぐる吉田家との内済証文を寺社奉行役人が習合家に提出させたのは、吉田家も何らかのかたちで吟味の対象とする必要性も視野に入れていたが、最終的には評定所レベルまでは訴訟を拡大させないという寺社奉行側の政治的判断があつたものと思われ、習合家もそれに従つた可能性が考えられる。後の文政七（一八二四）年に習合家と吉田家に神職支配をめぐる争論が発生した際に、当初は友山求馬などの習合家役人と吉田家関東役所執役宮川弾正が対決した。この吟味は幕府評定所で行われたが宮川弾正が喚問されることはなかった。本訴訟では「上意」というかたちで吉田家の意志が伝えられており、吉田家が強硬な姿勢を示す可能性は高かった。そのような予想がある以上、関東役所レベルであつても吉田家を訴訟の場に関与させることは、幕閣も望んでおらず、また寺社奉行の権限を超えるものであつたと思われる。そのように考えれば、寛政八年の吉田家との争論に関して「大造に騒ぎ立て」と表記するなど吉田家に対する不快さを隠さなかつた習合家が、吉田家の神子許状発給自体を問題視せずに本山派修験への糾弾と和解という方策を選んだことにも納得できよう。

以上のように、対立の構造は、直接的には習合家と末端の本山派修験との梓神子職をめぐるものであつたが、本山派修験がささばたきに従事する神子職になることを可能にしたのは吉田家であるという事実を踏まえれば、習合家の家職を侵犯する行為を助長・補助するものとして吉田家は存在し、幕藩権力に庇護された位置から習合家に介入する行為を行つていたのである。吉田家との関係を軸にこの争論を捉えなおしてみれば、それは修験を介した習合家と吉田家との抗争という側面を有してい

たと言える。

この争論については、建前の上で当山派・吉田家は梓神子を支配下から排除しており、本山派は自派における神子の存在を認めていないので、近世前期から中期にかけて宗教者集団相互で展開された争論のように、直接的に支配下に該当する宗教者の争奪という様相を呈してはいない。

（４）文政の争論後における習合家と吉田家の関係

十八世紀末から習合家が固執した「ささばたき」は、梓弓による口寄や珠数占以上に重要な宗教的作法と考えたと思われ、文政十一年には梓神子法例に「ささばたき」の文言を追加するように寺社奉行に嘆願した（石山家文書「家道之秘録」）。梓神子職に従事する者の独占的支配ではなく、「ささばたき」という行事の独占的支配を企図したのである。幕末の梓神子法例（神奈川県厚木市萩原家文書・『厚木市史』近世資料編１ 杜寺）には「ささばたき」の文言は存在しないことから、寺社奉行には許可されなかつたことがわかる。

文政七年、下総国の神事舞太夫が吉田家関東執役宮川弾正役人により、神職に紛らわしい装束・名乗りを行う者として糾問されたことに端を発した争論では、田村沢之助（八太夫）程度の者に神職装束許可はできないはずのものと吉田家役人から罵倒されたことに対して習合家は激しく反発した（石山家文書「習合家吉田家公事願書済口下ケ御裁許写」）。習合家は幕府・寺社奉行に訴えた結果、文政八年二月、習合家は評定所において吉田家役人による習合家支配下の神事舞太夫への介入は不当とする、事実上の勝訴という裁定を得ることができたが、「装束之儀も

布衣之外一切配下へ者不免許候事」を改めて申し渡された。

神事舞太夫の装束許状は享保十六（一七三一）年に定められていたが、梓神子には装束に関する許状が存在していなかった。その裁許における指示を踏まえたものであろうか、文政十二（一八二九）年九月を史料的な初見とする梓神子法服許状が作成され、装束は梅・松・紅葉・雪笹などを模様とすることが定められた（埼玉県川越市尾崎神社文書・『新編埼玉県史』資料編一八 中世・近世 宗教）。吉田家との対立がこの時期において梓神子の装束整備にも結び付いたと思われる。

吉田家役人はこの争論でささばたきについても介入したものと思われるが、「何二而も手入ケ間敷儀為致間敷且吉田家二者梓神子職業ささはたき等者無之右職業配下へ不差免候事」という指示を受けることになり、改めて習合家支配下の梓神子のささばたき法式独占が幕府から認められた。

おわりに

習合家にとつての文政の争論は、陰陽師への敗北（神事舞太夫の占考禁止）に終わった文政元年の平次左仲との争論に始まり、吉田家の習合家支配下への介入禁止という文政八年の幕府評定所の裁定により宗教者集団相互の抗争としては終息した。修験との争論はその中間に位置するもので、この時期において習合家が重視していたささばたきの独占を寺社奉行に公認させるものであった。その意味において修験に対する相対的な優位性を公的には獲得することはできたが、その実効的保障までは担保されたものではないことも明らかになった。

ささばたきをめぐる修験との争論において、習合家は本来的な当事

者の一員たる吉田家を相手取ることができなかった。寺社奉行の裁定の場には、出訴した習合家（当主後見人と役人）の他には、相手方の触頭大行院・龍王院（三乗院煩による代理）・ミチが出るだけで、本山派江戸役所氷川大乗院も吉田家関東役所もその場に出ることも呼ばれることもなかった。習合家が争論の相手として出訴しなかったことも原因と思われるが、幕府は支配頭習合家と本山派江戸役所・吉田家関東役所を必ずしも対等に処遇していなかったためと考える。

朝廷につながりを有する本所たる三寶院（公家の門跡・聖護院（親王・公家の門跡）・吉田家（公家）、陰陽師本所の土御門家（公家）は、習合家と争論になつても直接争論の場に現れない。習合家と本山派・神職本所・陰陽道本所との社会的位置の相違が反映されているものと思われる。夷願人との争論では夷願人支配頭中西太郎兵衛と神事舞太夫支配頭Ⅱ習合家との談判が行われたので、幕府は支配頭Ⅱであれば社会的地位が同じ存在として扱っていたものと思われる。

紙幅の関係で触れることはできなかったが、本山派本所・当山派本所から梓神子職の執行を禁止されていても、「梓神子」の名目でなければ、ささばたきなどの法式を行うことができるという認識が末端の修験には存在していた可能性がある。組織的な建前（統制）と実態の乖離は宗教者に限らず普遍的に社会に存在するが、個別修験においてはどのようにその乖離が存在したか、という点について実証的に解明する必要がある。宗教者相互の争論の構造を究明するためには、以上のような本所と支配頭の社会的地位の相違、宗教者集団内部における建前と実態の乖離の実証的な解明を踏まえて行われる必要がある。今後の課題として筆を置くことにしたい。

【参考文献】

- 井上智勝「神道者」 高埜利彦編『民間に生きる宗教者』 吉川弘文館 二〇〇〇年
- 井上智勝『近世の神社と朝廷権威』 吉川弘文館、二〇〇七年
- 梅田千尋『近世陰陽道組織の研究』 吉川弘文館 二〇〇九年
- 神田より子『『神子と修験の宗教民俗学的研究』 岩田書院 二〇〇一年
- 佐藤晶子「西宮夷願人と神事舞太夫の家職争論をめぐって」 橋本政宣 ほか『神主と神人の社会史』 思文閣出版 一九九八年
- 関口真規子「菊池家所蔵『当山修験并神子御条目』について」『文書館紀要』 第二八号 埼玉県立文書館 二〇一五年
- 高埜利彦『近世日本の国家権力と宗教』 東京大学出版会 一九八九年
- 長岡克衛『『ののゝ巫女』の研究』『信濃』一〇巻一二号 信濃史学会 一九五八年
- 中山太郎『日本巫女史』 大岡山書店 一九三〇年
- 中野洋平「信濃における神事舞太夫・梓神子集団の歴史的展開」『芸能史研究』一七九号 芸能史研究会 二〇〇七年
- 中野洋平「信濃における神事舞太夫と梓神子」 小松和彦ほか『日本文化の人類学／異文化の民俗学』 法蔵館 二〇〇八年
- 西田かほる「神子」 高埜利彦編『民間に生きる宗教者』 吉川弘文館 二〇〇〇年
- 西田かほる「近世の身分集団―信濃国における芸能的宗教者―」 高埜利彦編『元祿の社会と文化』 吉川弘文館 二〇〇三年
- 橋本鶴人「習合神道神事舞太夫に関する一考察」『所沢市史研究』第十九号 所沢市教育委員会 一九九六年
- 橋本鶴人「近世相州の神事舞太夫と神楽師集団の動向―愛甲郡萩原家・祓講を中心に―」『民俗芸能研究』第三十六号 民俗芸能学会 二〇〇四年
- 橋本鶴人「習合家神職集団の形成と展開（上・下）―近世武州における神事舞太夫の事例を中心に―」『埼玉地方史』第五六・五七号 埼玉県地方史研究会 二〇〇六・二〇〇七年
- 橋本鶴人「武州秩父郡における神事舞太夫の消長と変遷」『埼玉地方史』七十一号 埼玉県地方史研究会 二〇一五年
- 橋本鶴人「習合神道神事舞太夫の職分と集団形成」『部落史研究』二号 全国部落史研究会 二〇一七年
- 橋本鶴人「近世地域社会と宗教者の社会的地位―神事舞太夫・梓神子の事例から」『東日本部落解放研究所編『東日本の部落史』Ⅲ 現代書館 二〇一八年
- 林淳「神事舞太夫と修験の争論」『人間文化』二三号 愛知学院大学人間文化研究所 二〇〇八年
- 林淳『近世陰陽道の研究』 吉川弘文館 二〇〇五年
- 藤沢靖介「民間宗教者・芸能民・『賤民』―舞々神事舞太夫と民間宗教者統制の研究から」『解放研究』二二号／『明日を拓く二八号』 東日本部落解放研究所 一九九九年
- 藤田定興『近世修験道の地域的展開』 岩田書院 一九九六年
- 宮本袈裟雄『里修験の研究』 吉川弘文館 一九八四年
- 吉田栄治郎「近世大和の巫女村と口寄せの作法」『東北学』四号 東北芸術工科大学東北文化研究センター 二〇〇一年